

Title	大学礼拝を盛んにするために : 大学礼拝論学習事始
Author(s)	標, 宣男
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume21 : 125-134
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2742
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

大学礼拝を盛んにするために

— 大学礼拝論学習事始 —

標 宣 男

はじめに

私たちの大学に待望久しい礼拝堂が完成し、聖学院大学はキリスト教大学らしいすばらしい外観を与えられ、今後のキリスト教に基づいた教育活動が一層盛んになることが期待されていると思います。しかし、そのような時、私の心にはある不安が生じたといったら驚かれるかもしれません。

私がこの大学に奉職して一七年になります。その間、聖学院大学の礼拝は四号館の四階の大教室でもたれてきました（短大のみの時代には一号館の四階の大教室が使われていました）。しかし、このような立派な礼拝堂が与えられた今、あの大教室における礼拝を私たちはどのように捉えていたのか、ほんの三ヶ月前の状態を思い返しています。当時、大教室での礼拝に出席するたびに、「専用の礼拝堂がないキリスト教大学などとは考えられない。学校を作るときに、まず礼拝堂を作るべきであつたのに」、などと勝手な意見を述べてはいたのですが、しかし、そこでもたれる礼拝が礼拝ではないなどとは思ってもみませんでした。それどころか、騒がしい食堂の上でもたれる礼拝は、

確かに「大学の（中の）礼拝」であったと思っています。それでは、私たちはあの大教室を礼拝堂と想っていたのでしょうか。礼拝堂建設の計画が無かった頃はいざ知らず、計画の存在を知らされたあとでは、礼拝に集うものはみな、あの教室は、いずれ与えられる礼拝堂の「仮の姿」、との思いを持っていたのではないのでしょうか。しかし、私は思うのです。ひよつとすると、形ある礼拝堂がないだけに、私たち当時の礼拝に参加した者はみな、心の中に「礼拝堂」を持っていたのではないのでしょうか。さらに、私は思うのですが、この「心の中の礼拝堂」は、抽象的であるゆえに、いつも大学の中心に位置していたのではないのでしょうか。

目に見える礼拝堂が完成された今、学生をいかに北キャンパスに惹きつけるか（それは、それら学生が如何に多く喜びを持って礼拝に参加するようにするかにつながる）の議論が起こっています。わたしは、それが、私たちの心の中にあつた「礼拝堂」を北キャンパスの隅の高台へと移してしまい、ただ遠くから眺めるものにしてしまうのではないかという私の不安を、他の人も共有していることの現われでなければよいがと思うのです。そして、もしそうならば、多くの学生がこの礼拝堂に集うために、そしてこの礼拝堂を私たちの心の中心にしっかりと位置づけるために、礼拝堂が与えられたこの時、私たちのこの大学礼拝について、それは何であるのか、あるいは何でないのか、少々迂遠ではあつても改めて考えてみる必要があるのではないのでしょうか。少なくとも私個人はそう思いました。

以上の理由から、以下では「大学における礼拝」とは何かを、考えてみました。しかし、これからお話しします多くのことは、文末の文献をご覧になればお分かりのように、「学校伝道研究会」および「キリスト教学校教育同盟」の編集した著作等から得た知識がほとんどであり、キリスト教センターあるいは大学チャプレンの先生方にとっては自明なことであろうと思いますが、キリスト教大学に奉職する不勉強な一人のレーマンとしてはここから考えざ

るを得なかったことをお許しください。なお、以下では「大学礼拝」と言う言葉を使わず、一般的な「学校礼拝」という言葉を大学の場合にも用いることにします。

大学教育における学校礼拝の位置

学校礼拝（大学の場合大学礼拝）を考えるにあたり、どの識者も共通して述べていることは、キリスト教学校における、学校礼拝の重要性でありましょう。例えば「キリスト教学校教師養成事業委員会」が一九九一年に出した論文集『キリスト教学校教育の理念と課題』の中に掲載されている論文⁽¹⁾⁽²⁾のなかで、赤城 泰氏と讃岐和家氏は、大学礼拝に対し異なつた立場を表明しているのですが、それ以前に、両者に共通している点が学校礼拝の重要性の表明であります。それを次に示す讃岐氏のことばによつて、述べておくのが良いでありましょう。

「両者に共通する主張としては、両者が、キリスト教学校における礼拝を学校の中心的な行事に位置付けている点、および礼拝が生徒（学生）の宗教的靈性の涵養と言う役割を果たすという理解を示している点であらう」⁽³⁾。

（一）内筆者

この共通意見の中で、後半の「礼拝が生徒の宗教的靈性の涵養と言う役割を果たす」という点に関しては、これが、キリスト教の靈的信仰的な内実を表わしているゆえに、大切であることは誰しも等しく認めることでありましょう。加えて、前半の「キリスト教学校における礼拝を学校の中心的な行事に位置付けている」と言う点は、これがキリスト教学校における礼拝を、制度的に具体的に位置付けるものである故に、大学組織の上から大変重要な指摘であります。この点に関し、倉松 功氏は、学校伝道研究会編の論文集『教育の神学』の中で、「最も重要なことは、学

校が礼拝を『公的、な校事』と考えているかどうかである^④、という言葉によつて簡潔に表わしております。

次いで、赤城、讃岐両氏の相違点ですが、それを同じく讃岐氏は次のようにまとめています。

「赤城『学校礼拝は教育的なプログラムと見なされてはならない』」

讃岐『学校礼拝は、人間の人格の中核的な構成契機である靈性の教育をもつて自ら独自の使命とするキリスト教学校にあつては、靈性の教育を統合し深化する役割を負うかぎりにおいて、教育的なプログラムの性格を帯びる』^⑤（傍点筆者）。

この簡潔にまとめられた赤城氏の意見の背後には、まず学校を考え次に様々なキリスト教的な要素をそれに付け加えているに過ぎない「キリスト教主義学校」が多くある、という「現代キリスト教主義学校批判」が存在するように思います。そして、讃岐氏もまた、礼拝を教育的プログラムと看做すことが、学校礼拝を第二義的なものとすることは現に戒められるべきであると述べています。しかし、赤城氏は、学校礼拝を「教育プログラム」と見ないならば、それは「純粹な宗教行事」と看做すことになり、その場合には「自由出席の原則ははずせなくなる」と指摘するのです^⑥。そうなりますと、これは多くのキリスト教学校の実情に合わないばかりか、現実問題として多くのキリスト教学校における「校事としての」キリスト教の位置を危うくしかねないと思うのは思い過ごしでしょうか。

そもそも礼拝を「教育的プログラム（の性格を帯びる）」と看做すことが、宗教的内実を失わせ、礼拝の輕視に当たるかどうかなどという問題の設定の仕方が適切ではないのかもしれない。この点について、斉藤正彦氏が同学校伝道研究会編の論文集『キリスト教学校の再建——教育の神学第2集』のなかで、

「教育の場における礼拝は、……他の教育研究活動から切り離された、キャンパス・ミニストリーのプログラムの一部ではなく、学校の教育活動をささえ、その成果を可能にするものであり、神認識に基づく教育の全

領域がその集約されている。……

高度に専門化した学問研究が全体を総合する知恵を失い、過熱した受験競争に煽られた知識偏重の教育が生徒の正しい自己発見を阻害している今日、聖なるものへの畏れに根差した『礼拝としての教育』を構築して、……今日の学問研究と教育が見失ったものを取り戻すことこそ、現代におけるキャンパス・ミニストリーに負わされた歴史的課題があるといつても過言ではない」（傍点筆者）。

と述べていることに尽きるのではないでしょうか。学校における礼拝は、『礼拝としての教育』として、「教育プログラムの一部」と考えられることにより、学校制度の中で制度的にはつきりした基礎を与えられることになりましたし、さらに、「教育プログラム（の性格を帯びるもの）」である以上、学生の学校礼拝への出席義務もまたこの枠内で正当化されると考えられるのではないのでしょうか。

学校礼拝とは何か

学校礼拝を、制度上教育プログラムと遊離しない形で考えねばならないことがわかりましたが、その上で問題になるのは、教会との関係であります。学校礼拝も礼拝である以上、その霊的生命の源を教会に求めなければならぬのですが、学校が教会でない以上、それは「公同の教会」に求めないわけにはいかないと思うのです。そこで、「大学」と「公同の」教会との関係が問題になってきます。この点について、『キリスト教教育辞典』にのった、小林公一氏の次のような考えは、学校礼拝とは何かを考えるに当たって、まず考える糸口を与えてくれるであります。

「キリストの御名によって立てられた……キリスト教主義学校も各個教会も公同教会と言う共通の地盤を持つていたのである。その意味でキリスト教主義学校の教会性が考えられる」^⑧。

歴史的に見て、多くのキリスト教学校が、教会から派遣され、キリスト教伝道の熱意に燃えた人々によって設立させてきたことは確かでありましょう。しかし、明治の初めならいざ知らず、現在のキリスト教学校が、「公教育の一翼を担う信者と未信者の共同体である」^⑨以上、教会とは区別される存在と考えられるのは当然でしょう。それが、先に述べた礼拝と教育プログラムの関係としても現れていると思うのです。それでは、この文章中に表わされたキリスト教学校の「教会性」とは、どのようなものでありましょうか。それは小林氏の次の文章から理解できるように思います。

「けれども、このことは、キリスト教主義学校が直ちに教会であることを意味しない。キリスト教主義学校は、学校なのであって、その学校が教会によって支えられているのである。その意味でキリスト教主義学校の教会性は、間接的であり、媒介的なのである。このキリスト教主義学校の教会性は、学校活動としては、礼拝等において主として果たされる」^⑩（傍点筆者）

この最後の「キリスト教主義学校の教会性は、学校活動としては、礼拝等において主として果たされる」というところから、学校における「教会性」が、学校礼拝に現れることがはっきりします。そしてそれは教会に支えられているのです。それならば、その「教会性」の何たるか、あるいはその特徴は、学校礼拝を「教会の（公同の）礼拝」からみるときよりはつきりするのではないのでしょうか。そうであるならば、そのようにしてみたときの「学校礼拝」とは何でありましょうか。これについて、まず、学校礼拝は何でないかという点から、倉松氏は次のように述べています。

「キリスト教学校の礼拝は聖礼典の執行を伴わない。短い奨励と祈りと讃美からなる文字どおりの小礼拝である。特に聖礼典を伴わないという点で、礼拝としては十分なものとはいえない。なぜなら、キリストにあずかることは主の洗礼と聖餐にあずかることであり（ロマ六・三、一コリント一〇・一六―一七）聖餐にあずかることなく、主の体にあずかるとは言えないからである」^⑪。

すなわち、学校礼拝は「公同（きどう）の礼拝」とは異なるものである、という主張であります。それでは、学校礼拝とは何でありましょうか。それは、文中の「短い奨励」というところからも読み取れるのですが、倉松氏が、

「すなわち、圧倒的多数の未信者からなる日本のキリスト教学校は『信仰は聞くことによる』聖書のみことばを何よりも支えとし原点（げんてん）としていっているといつてよいであろう（ロマ一〇・一七、ガラテヤ三・二）」^⑫。

と述べるこの言葉の中により明瞭に現れていると思うのです。いいかえると、学校礼拝において強調されるのは、「御言葉を学ぶ説教あるいは講話という契機」^⑬であり、それは公教育の場としては間接的にならざるを得ない伝道に関し、唯一直接的な機会といえるものを提供する場であるということではないでしょうか。そして、この学校礼拝における「御言葉を伝える」という行為は、「公同（きどう）の教会」の持つ役割の一部である伝道という重要な役割を担っていることを示していると言えるではありませんか。そして、この「伝える」という行為は、「教育プログラム（の性格を帯びるもの）」としての学校礼拝の性格とも整合するものでありましょう。しかし、この限定的な性質をもった学校礼拝も、「祈りと讃美」をもった礼拝である以上、「公同（きどう）の礼拝」との間に「優劣」があるわけではなく、「幅広い多様な礼拝様式の中の一つ」^⑭であると指摘されていることをも、付記しておかなければならないとおもいます。

どのように御言葉を伝えるか

このような、学校礼拝の場が教育プログラムの一部（教育プログラムの性格を帯びるもの）と看做せるものであり、また御言葉を伝えるという点に象徴的に表わされるような伝道に特化した役割（もつと踏み込んでいえば公同の礼拝へ導くための種を蒔くという役割）を持つものであるという、学校礼拝の本性の確認はいろいろなことを考えさせてくれました。まず前者から、キリスト教学校を構成するのは、信者のみではなく圧倒的多数の未信者の学生諸君でもあることから、彼らも礼拝を構成する重要な一員と考えざるを得ないということです。そうであるならば、何らかの教育的指導の下、彼らの積極的な礼拝への関心と参加を、促すようなプログラムが出来ないか、あるいは考えるべきではないかということになるのではないでしょうか。さらにまた、この点に関連して、後者の公同の教会とは異なつたものとしての学校礼拝の役割からは、御言葉の伝達形式として公同の礼拝では出来ない自由な礼拝形式が赦されるかもしれないという思いが出てくるのですが、いかがでしょうか。

しかしこれらは、これまでの学校礼拝（我々の場合は全学礼拝）のあり方の全てを否定して新しいものにせよといっているわけではありませんし、全学礼拝を軽んぜよといっているわけでもありません。ただ、大学そして平日の授業の間という特殊な環境の中で、その環境を生かした、あるいは相応しい自由で多様な礼拝形式、あるいは御言葉（この表現もなるべく広く解釈して）の伝達形式も考えられないか、ということであります。この点につきましても、斉藤氏が述べている次の言葉は意味深いように思われます。

『「宣べ伝うる」ことなしに、福音による教育は成り立たないはずである。……もちろん教育は、教師の一方

的な伝達によるのではなく、生徒の関心と相互関係において成り立つものであるから学校伝道には主題の伝達と共に、主題に対する学生生徒の関心と呼び覚まし育てる教育的配慮と工夫が必要である。学生生徒が自分の生き方の問題として聖書に関心を持つことなしに、教会の説教のような一方的な宣言だけでは学校礼拝における説教は成り立たない¹⁵。

ここには、学校礼拝を構成する（あるいはすべき）様々な学生への配慮の必要性が、強調されていると考えられるのではないだろうか。そして、その配慮なくして、「一方的な宣言だけでは」、大学における礼拝を盛んにすることはありえないといっているように思います。新しい礼拝堂が与えられた今、大学礼拝の持ち方について、「学生伝道」という立場から思い切って発想の大転換を試みたらいかでしょうか。その中には礼拝堂を一般学生にとっても楽しみやすいものにする努力も含まれるのではないのでしょうか。

以上、素人が専門違いの分野で、素人なるが故の勝手なことを申し上げました。付け焼刃の勉強による多くの誤解や曲解、あるいは考えかたの相違があるかと思えます。しかし、この拙い考察が、大学礼拝を盛んにさせ、キャンパス生活を共にする私たちの心の中心に、このすばらしい礼拝堂をしっかりと位置づけさせるのに、結果的にではあっても何がしか役立つならば、幸いといわざるを得ません。

注

(1) 赤城 泰「キリスト教主義学校と礼拝」（キリスト教学校教師養成事業委員会編『キリスト教学校教育の理念と課題』キリスト教学校教育同盟、一九九一年、所収）

(2) 讃岐和家「キリスト教教育の価値的枠組みと礼拝の問題」（注(1)の書、『キリスト教学校教育の理念と課題』所収）

- (3) 讃岐和家「キリスト教学校における礼拝 解題」(注(1)の書、『キリスト教学校教育の理念と課題』所収)、一七七頁
- (4) 倉松 功「キリスト教学校礼拝論」(学校伝道研究会編『教育の神学』ヨルダン社、一九八七年、所収)、一一八頁
- (5) 讃岐和家、注(3)の書、一七八頁
- (6) 赤城 泰、注(1)の書、一四〇頁
- (7) 斉藤正彦「キリスト教教育におけるキャンパス・ミニストリーの役割と位置づけ」(学校伝導研究会編『キリスト教学校の再建 教育の神学第二集』聖学院大学出版局、一九九七年、所収) 二二三〜二三四頁
- (8) 小林公一「キリスト教主義学校」(高崎 毅、山内一郎、今橋 朗編『キリスト教教育辞典』日本基督教団出版局、一九六九年、所収)、一二三頁
- (9) 斉藤正彦、注(7)の書、二二九頁
- (10) 小林公一、注(8)の書、一二五頁
- (11) 倉松 功、注(4)の書、一二四頁
- (12) 倉松 功、注(4)の書、一一八頁
- (13) 讃岐和家、注(2)の書、一六九頁
- (14) 赤城 泰、注(1)の書、一三九頁
- (15) 斉藤正彦、注(7)の書、二二二頁

(二〇〇五年二月二四日、全学礼拝懇談会)